片倉城(八王子城)（都史跡)(八王子市片倉町)(片倉城跡公園)

片倉城（かたくらじょう）は、現在の東京都八王子市片倉町にあった日本の城。別名八王子城。

概要

片倉城は東京都八王子市片倉町にあった平山城である。扇谷上杉氏の家臣長井氏が拠ったとされる。現在片倉城跡公園として整備され、公園内にはカタクリの群生地がある。

歴史・沿革

- 平安時代中期以降、武蔵七党の一つ、横山党の領地となった。
- 建保元年（1213年)、和田合戦により大江広元の領地となった。
- 室町時代、大江広元を祖先に持つ大江備中守師親あるいは長井時広が在城(築城)したと言われているが、諸説ある。
- 長井氏以降の片倉城に関しては詳らかでないが、その堅固な構造から、後北条氏の領地になってからも砦として戦国時代後期まで使用されたと考えられる。
  1569年三増峠の戦いで北条氏照と北条氏邦が出陣した城。
- 昭和46年（1971年)、八王子市により片倉城跡公園として整備される。
- 平成11年（1999年)、東京都指定史跡となる。

構造

湯殿川とその支流の兵衛川に挟まれた小比企丘陵の東端に位置する。主郭及び二郭が配置され、北方には腰郭が設けられている。丘陵方面は空堀で遮断する構造となっているが、南東に開く虎口に、二重の馬出し様の小郭を設け、守りを更に厳重なものとしている。主郭二郭間は鉤の手状に折れた空堀で区画され、空堀中央部に設けられた木橋を防御する構造となっていた。また、主郭東面には櫓台、張出部、横堀、横堀内の櫓台が設けられ、二郭同様厳重な構えとなっている。

遺構

太平洋戦争中の高射砲の設置時、及び、公園としての整備時に、遺構の一部が旧態を失ったとされるが、空堀、土塁、土橋、櫓台等が良く残る。

Wikipediaによる

南北を兵衛川・湯殿川によって挟まれた小比企丘陵の東端、現在の八王子市片倉町に築かれた中世の城館で、その遺構は都指定史跡となっている。城域は東西約250メートル、南北約200メートルで、標高は143メートルである。空堀（からぼり）で区切られた曲輪（くるわ）が東西にあり、主郭と考えられる東側の曲輪は東西約50メートル、南北約60メートルの広さを持つ。ただし、西側の曲輪も主郭の2倍以上の大きさがある。歴史的にはまだまだ不明な点の多い城である。

（1）築城前の片倉

片倉城を初めて築いたのは、鎌倉幕府の政所別当大江広元の第二子長井時広の子孫であったとされる。3代将軍源実朝の1213年（建暦3）5月、和田合戦で和田義盛に加勢した横山党の横山時兼が滅ぶと、広元は合戦の恩賞として片倉の地を含む横山庄を拝領した。広元の死後、次男時広は武蔵野国長井庄を本拠として長井氏を称したが、その子孫は代々、鎌倉幕府の評定衆（ひょうじょうしゅう）として活躍し、片倉の地を領有し続けた。

鎌倉幕府が滅亡し、建武の新政・南北朝動乱の時代になっても、長井氏はその実務能力を活かして建武政権や室町幕府で重きをなした。時広の5代目の子孫長井広秀は、足利尊氏の側近として各地を転戦し、広秀の従兄弟にあたる時春は鎌倉公方（かまくらくぼう）足利基氏（あしかがもとうじ）の側近として関東支配に協力した。また、実名（じつみょう）は伝わらないものの、法名（ほうみょう）を道広（どうこ

う）と称した人物も、広秀や時春の後、鎌倉公方の評定衆頭人（ひょうじょうしゅうとうにん）となっている。

（２）片倉城築城と山田広園寺の創建

南北朝の動乱が進展するなか、在地性を強化する必要が生じた長井氏は、南北朝末期には横山一帯に土着して在地土豪化した。そして、片倉の地に中世城館としての片倉城を築き、その西隣の山田に広園寺（こうおんじ）を創建した。

『広園開山行録』には、「康応二年（1390）二月二十一日、武州横山に赴き、広園禅院を鼎建す、壇越長井道広（もとは漢文、便宜上、書き下し文に改めた）」とあり、広園寺の創建は南北朝合一がなる少し前の時期であったことがわかる。また、長井道広が開基であったことも判明する。この道広を広秀の法名とみなす説もあるが、広秀の法名は「道昇」であったとする史料も残っているうえ、足利尊氏の側近として活躍した広秀がこの時期まで存命していたかどうかは疑わしく、むしろ広秀・時春の一世代下の人物と考えるべきであろう。ともあれ南北朝末期に、長井道広なる人物が広園寺の創建、片倉城の築城を行い、在地土豪化する道を探っていたことは確かである。

（３）戦国時代の片倉城

広園寺梵鐘の 1468 年（応仁 2）の改鋳銘には「大檀那大江朝臣広房」という名がみえることから、長井氏はこの頃までは片倉の地にある程度の影響力を残していたことがわかる。とはいえ、15 世紀中ごろには、武蔵国守護代を歴任していた大石氏が、旧船木田庄内の由比本郷を拠点にこの地域一帯を支配下に入れていたので、大江広元の次男時広を祖とする名門長井氏も、かつての勢力は失っていたと考えられる。

大石氏は、1521 年（大永 1）、定重の代に滝山城を築いて本城とした。16 世紀の半ば、小田原の後北条氏（ごほうじょうし）が大石氏を服属させ、北条氏照（ほうじょううじてる）が滝山城に入ってここを本城とすると、片倉城は滝山城の支城となり、後北条氏の南武蔵支配の一翼を担うことになった。しかし、1590 年（天正 18）、豊臣秀吉の関東侵攻によって後北条氏が滅亡すると、片倉城は廃城となった。

八王子がわかる事典による

本丸

空堀